ポーカーフェイス

須崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポーカーフェイス

【Nコード】
N1334P

【作者名】
須崎

【あらすじ】
久しぶりに飲んだお酒が駄目だったんだ、うん。間違っても深く考えすぎない、良くて前向き、悪く言えば単細胞な私の性格のせいでは無いはず！…榊原英里24歳、会社ぐるみの罠にハメられました。
罠と偶然が呼んだ愛のハプニング満載なコメディらぶ。短編予定。
大幅にカットしました。カットした部分は番外編にするつもりです。
別HP（管理人詩都は同一人物です）は公開準備中です。

プロローグ（前書き）

初めまして、須崎です！
なろうに投稿するのは初めてになります。
このお話は私的にうふふふーwな場面をたくさん入れようと企んでたり。
楽しんでいただけたら跳んで喜びます＼（^＿^）／

プロローグ

ぎゃー！
「英里さん逃げちゃ駄目でしょ」
「逃げなきゃ奪われる！」
後ろから腰に巻き付けられた腕から逃れんとする。無駄だと思っても諦めないことは大事だ！
「何が？」
ぎゅ、と逃げられない程度に力が入った。
「私の身体が」
処女だなんて言えるかー！！
「…へぇ」
とっさにごまかそうとしたがあまり意味がなかった。
というかまずった。今のはまずったぞ！
そう思った瞬間、首筋に痺れが走った。
「っん」
ま、待て待て待て！やばいよっ！
今ので身体が密着していることを意識してしまう。背中、腰というよりお腹に腕が、って胸が微妙に腕にあた…っ！
顔熱い！いやもう全身熱い！誰か助けてください！！
「し、城川さん離して」
「嫌です」
即答ですか。
あ、諦めたら終わりだ私！！

?金曜日の罠

事の発端は週末の仕事帰り、近頃結婚が決まった宮野さんに
「もう帰るんだよね、用事ないよね？」
と可愛い顔が恐ろしく見えるほどに危機迫る勢いで詰め寄られ、とっさに肯定してしまったのがいけなかった。

「人数確保ぉーっ！」

携帯電話を片手に叫ぶ彼女に私は事情を察した。”週末”と”人数”のキーワードで推測されるものはたった一つ。

飲み会とは名ばかりの合コンに違いない…！

私ももう２４歳、結婚相手どころか彼氏も高校生以来ずっと縁がない。しかも唯一付き合った彼氏とは３ヶ月で自然消滅。

お互い本気じゃなかったのだろうと私は思ってる。

このままじゃ駄目かなぁ、くらいにしか思っていなかったし、今もその気持ちは変わらない。
面倒だけど、この機会だし久しぶりにちょっとだけ飲んで抜けようと思ってたのに。

まさか、ねぇ。
私が獲物だとは思わないでしょ。

こうして私はまんまと『罠』にかかってしまったのだった。

?金曜日の偶然（1）（前書き）

一話一ページで投稿してます。

?.金曜日の偶然（1）

「榊原さん、こっち」
会場に着いてすぐ、我が社の三大美形の一人である城川さんが奥の席から手をあげて教えてくれた。
相変わらずの笑顔は悩殺モノだ。あ、今のお姉さん落ちたな。私も殺られそうです。
今回の会場である駅前のバーは、こじんまりとした落ち着いた雰囲気がどこか西欧風の田舎を思わせる。
ほぼ時間通りに着いたのに城川さんを除いて誰も来ていないようだった。
先に飲んでましょうという城川さんの意向に賛成する。
その間は仕事の話とか、宮野さんの話をしたりした。なんでも彼女の未来の旦那様は城川さんの悪友（そう言っていた）で、結果的に仲をとりもったことになったそうだ。
城川さんを恋のキューピッド役にしてしまうなんて、何者なんだ宮野さんの彼氏。
話すことがなくなってきて、ただ静かに飲んでいた。
そこに気まずさはなく、不思議とその人がいるという安心感があった。

城川さんって癒しオーラでもあるのかなぁ…

そんなオーラが見えるはずもなく、ふと彼の顔が涼しげなことにずるいと思った。

?金曜日の偶然（2）

「…城川さんお酒強ぃ？」
「ん？」
「なんかよゅーって感じだよ」
もうそろそろ限界な私に比べ、彼はほんのり赤い顔が健康的だねと言われる程度。
何がおかしいのかくすくす笑ってから答えた。

あなたの笑顔は人ひとり殺せます。未遂だけど。

「そうでもないよ。俺の顔赤く無い？」
「少しだけ。血色いいですねってくらい」
私はふてくされるようにテーブルに突っ伏した。

「雨降ってるけど、榊原さん傘ある？」
「持ってきてない…」

耳をすませると結構降ってるみたいだ。

駅まで走ればなんとかなるかな、と少し機能低下気味の頭で考える。
「…12時か。止むのを待つにはもう遅いな」

今夜はぐっすり寝れそうだ。明日は朝寝坊しよーかなぁ。

「帰りますー？」
「うん、榊原さん歩ける？送ってくよ」

週明け、女性社員が怖いかもしれない。

このとき私は何の目的でここにいるのか、頭からすっぽり抜けてしまっていた。

他のメンバーが未だに来ないことを疑問に思うどころか、気づきもしなかったのだ。

果たしてそれは酔いのせいなのか、それとも――

?金曜日の偶然（3）

歩き始めて数分、弱くはない雨に打たれると彼女の酔いも少しは覚めると思ったのだが。
「城川さーん、駅こっちじゃないよ…？」
「っ」
方向を変えたことに気付いた彼女が俺の腕を取ったと同時に、柔らかいものが軽く押し付けられる。
わざとなのかと視線で問おうかと思ったが、彼女は至って普通だった。その顔だけは。
彼女の足はおぼつかない。どうやら俺の腕は支えにしているらしい。
「雨がひどくなってきたから、変更」
「？…どこに？」
首を傾ける仕草は小動物のようで可愛いらしい。
「俺の家、といってもアパートだけど。この近くなんだ」
彼女の濡れた髪が顔に貼りつき、コートの合わせ目から見えるワイシャツは下着が見えそうなくらいだ。
酔った彼女をそんな状態で帰らせるつもりは毛頭無い。
「駅まで行くにはまだかかるし、傘も貸せるからね」
抱えられた腕に、彼女が身体を震わせたらしい振動がきた。
「…寒い？急ぐか」

雨は予想外。

――――けれど、まだ。

?金曜日の動揺（1）

気がついたら人様の家のソファに座って、ホットミルクを戴いていた。

さっき頭を拭いてもらってたような…その前に雨の中を歩いて、あれ？私何した？足がふらついたから近くのものにつかまって、でもってそれはあったかくてつい抱きつい…うわぁやばい！

どうやら私は酔って記憶が曖昧で、ホットミルクという刺激で覚醒した、と。

「榊原さん、まだ酔ってる？」
「わぁっ」
「覚めたみたいだな」

びっくりした。隣りに座ってるのに気付かなかったよ。

ここまでの道のりを覚えているかと聞かれて、頷いた。とてもじゃないが堂々と答えられない。

恥ずかしすぎて、穴があったら入りたいとはこのことかと実感する。

「これで拭いて」
そういえば頭は拭いても身体はまだだったのでありがたく頂戴する。
「ありがとう」
「風邪引くから風呂入っていって。着替えは妹のがあるから気にしなくていい」
ここに置いとく、と言って別の部屋に行った。

「…お風呂？」

待って、着替えがどうとかいう話じゃないよ！お、お風呂って！ていうか妹さんいたんですかってあぁ！普通城川さんが先でしょうが！

とにかく丁重にお断りしなくては、と彼の後を追う。

「城川さん！」

私は勢いよく彼が入ったと思われる部屋のドアを開けた。

?金曜日の動揺（2）

そして固まった。

城川さんは着替えている途中だったらしく、上半身裸で肩にタオルをかけていた。

「…っごめんなさい！」

きゃぁぁ私ったら何やってるの！

すぐさま出て行こうとするが止められた。彼の腕と思わしきものが右から私の前を通り、左肩を押さえる。

後ろにいる城川さんの気配が近くに感じられ、私は再び固まってしまった。

「待って。どうかした？風呂ならさっきの部屋から直行だけど」

上から聞こえた声にはっとして振り向く。

「お風呂は城川さんが先です！」

彼は一瞬ぽかんとして、すぐに納得がいったような顔になる。

「あぁ、俺は着替えれば平気。榊原さん入っていいよ。顔赤いし、大丈夫？」

それはあなたが色男だからですっ。

まだ乾ききっていない艶やかな黒髪に均整のとれた引き締まった身体。そしてなにより至近距離にある整った顔。

振り向いたときにしっかり見てしまったのだ。

男に免疫がなくてすいませんね、赤くなって当然です！

「…でっでも私」

「……榊原さん」

「えっはい何でしょう！」

「早く入ろうね？」

笑顔。

逆らえない何かが確実にあったと思う。

「はいぃっ！！」

叫ぶように返事をしながら出ていく私だった。

?金曜日の動揺（3）

自宅に着いてすぐに彼女の頭を拭く。色素の薄いブラウンの髪は、肩までの長さとはいえ水気を取るのに時間がかかった。

明日休みで良かったですね、と一応会話はしていたのだが、軽く微笑む彼女に見とれて時々手も会話も止まってしまったりした。

それからリビングのソファに座らせてホットミルクを渡すが、ぼーっとしながらホットミルクを口にしようとするところを見るとまだ酒が抜けきっていないようだ。

身体は拭いてやるわけにもいかず、タオルだけ渡して自分も着替えることにした。

風呂は朝出る前に予約したからすぐに入れるだろう。

まったく彼女のあの格好は目のやり場に困る。さっさと部屋を出るに越したことはない。

下を脱ごうとするところで榊原さんがノックもせずに入ってきた。
大分驚いたが、それ以上に彼女が動揺しているのがわかる。
身体を拭くように言ったのにまだ拭いていないようだし、普段取り乱すことがない彼女が顔を赤らめ動揺しているのがおかしかった。

飛び出そうとするのを押さえると、ますます熱を持ち始めたのが触れる肩から伝わってくる。

……熱すぎないか？

さっきから反応が鈍かったり逆にテンションがおかしかったりするのは熱のせいかと焦る。

俺に意識を向けてもらおうとしたのには少し強引だったと認めよう。

――俺だけの責任とは微塵も思っていないが。

?土曜日の回想（前書き）

お待たせしました！

久しぶりなので文章が少々変わっているかもしれません…

?土曜日の回想

日の光が眩しくて、仰向けに寝ていた姿勢から体を横に向けた。
目を擦りながら、なんとなく今は何時だろうかと思い、そもそも寝る前は何をしていたのかと記憶をたどる。
「あれ、夕方…？」
半開きの目で赤みがかった光に照らされた部屋を見渡すと、寝ぼけていた頭が急速にまわりはじめた。
それと同時に、今までの出来事を思い出して熱が顔に集中してしまう。

――あれは反則だ、普段のあの人がイエローカードなら、アレはレッドカードで即退場だっ！

この熱をなんとかしたくて、頬に両手をあてながら寝台の上で脚を曲げてうずくまるが、逆効果だった。
視界が遮られたことで、こちらに向けられる優しい眼差しや額に触れた大きくて冷たい手、時々砕ける口調……、それらを映像と音声付きでまざまざと思い出してしまうのだった。

そうだ、帰らなきゃ。
唐突にそう思って腕を上にのばすと、軽く節々の音がした。
おそれ多くも昨夜も今朝もお世話になった身である。さすがに二日も泊まるわけにはいかない。
というかいたたまれなくていられない。お粥を手づから食べさせてもらったことなんて記憶から抹消してしまいたいくらいだ。

昼を過ぎてまで寝ていたせいか少し頭は重いが、体のほうはそうで

もないようだった。
借りていた（城川さんの妹さんの）ワンピースから自分のスーツに着替えた。汗でべたつくがこの際気にしない。
荷物を確認し、寝台を整える。
気付かれないようにそっと出ていこう。
書置きを残して部屋から出て、リビングから玄関へ行こうとしたときだった。
「どこに行くの？英里さん」
自室と思われる扉の前で、あの麗しい笑顔を浮かべた彼がいた。

?土曜日の暴露（1）

「ねぇ英里さん、どこへ行こうとしたの？」
幼い子供に向けるような表情でさえも、どこか艶めいた彼の雰囲気にのまれてしまい体が動かない。
「いや、その、帰ろうと…」
こちらに近づいてくる歩みの速さは普通なのに、とてもゆっくりと感じる。
来てほしくないような、もっと近くに来てほしいような、矛盾した思いがうまれる。
顔をのぞきこむように頭を下げてきて、私は自分が俯いていることに気がついた。
彼の手が私の頬に触れた瞬間、思わず私は走り出そうとしが、それは叶わなかった。

ぎゃー！
心の中でそう叫ぶほど、私の頭は混乱していた。
「英里さん逃げちゃ駄目でしょ」
後ろから両腕で抱きすくめられて、彼の胸に触れる背中が燃えるように熱い。
心臓が激しく鳴り、音が体を通して伝えられそうなほどだった。
「逃げなきゃ奪われる！」
今朝に言われた言葉が頭をよぎる。
――大人しくしないと、襲うよ？
「何が？」
ぎゅ、と逃げられない程度に力が入った。
処女だなんて言えるかー！！
「私の身体が」

「…へぇ」

まずい、非常にまずい気がする。

?.土曜日の暴露（1）（後書き）

こうして冒頭に至るのでした。

?土曜日の暴露（2）

「ところで英里さん」
この体勢でところでも何もないのでは…？
というのも、私たちは先ほどの体勢のままリビングの床に座りこんでいた。
「俺のこと、ずっと見てたよね」
「っ！？」
びっくりして、何も言えないまま振り返って彼の顔を見つめた。
その目に映る自分の顔は、なんともいえない間抜けな表情だった。
「…んっ？」
唇に、何かが触れた。
一瞬で離れたそれを理解した途端、落ち着きかけていた思考を再び乱した。
「ていうか、そろそろ気付かないかな。俺は貴女が好きだってこと」
至近距離で熱い、真剣な彼の目に打ち抜かれる。
「えっあっ？」
「ちょっとどころかだいぶ強引だったんだけど…もう止まれないから」
本性出して、いいよね？

優しい、だけど確固とした意図を持つ腕に、私は囚われてしまった。
否、ずっと前から、この強い瞳から目が離せなかったのは私。
――――逃げ出そうとしなかったのも、私。

彼、城川巳槻は、社内で知らない人はいないと言えるほど、顔良し器量良しで有名な男だ。もちろん仕事は難なくこなす。同期であるにも関わらず知らなかった私ははっきり言って異様である。

初めて彼の話を聞いたときの私は、正直うさんくさいと思った。ドラマでもない限り、そんな完璧な男なんているはずがない、そう確信してさえいた。

あるとき、彼と同じ企画のチームに入ったことがきっかけで、彼を観察してみようと思った。私の自論が正しいかどうかにあまり興味はなく、対象が近くにいたためにただなんとなく見ていただけだ。結果としてはある意味では正しいと考えられるようなものであったが、明確に正しいとは言えない結果だった。

どういうことかは後で述べるとして——ひとつだけ、わかったことがある。

いつの間にか、彼の領域から抜け出せなくなっていたのだ。

?日曜日の期待

深い口づけは私の意識を朦朧とさせ、彼の表情と太くて長い男性の手は、私を恍惚とさせる。
溜まり続けた溢れる想いが口から漏れた。
「ん、はぁっ、す、き…っ」
彼の手が止まる。力いっぱい抱きしめられて少し痛かったけれど、嬉しかった。
「俺も、好きだよ。愛してる。…はぁ、やばいな」
互いの心臓の音が聞こえるなかで、私たちは心と身体を繋げたのだった。

夢心地な朝を迎え、それから少し（1、2時間は少しである）時間が経ってから（そこは突っ込まないように！）私はようやく真実を知った。
飲み会は始めから私と城川さんだけだったとか、本当は私を連れ帰る予定はなくて、これから親密になるつもりだったとかなんとか…
前者については気付けよ私。

「流されてこうなったわけじゃないからな」
私の頭を撫でながら、言い含めるように言う。そして、首筋を強く吸った。
「ぁっ」
「きれいにできた」
「…もう」
見える位置に付けられると、明日の服のチョイスに困ってしまうで

はないか。

あどけない顔で笑う顔は、初めてみる表情だった。優しい顔、真剣な顔、ちょっと意地悪な顔も、全部見たい。会社とはちがう仕草、男らしい、でも決して乱暴ではない口調。そういうのももっと知りたいと思った。

今回わかったことは、彼がなかなかの猫かぶりであるということだ。

?日曜日の期待（後書き）

月光に後日ＵＰする予定です。
…明日は無理です宣言します。

あっさりし過ぎてごめんなさいぃぃぃ！
なだれ込む前の予定が、城川が耐えられなくなったためにこうなりました（ぇ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1334p/

ポーカーフェイス

2011年12月25日00時56分発行